

キャラクター名
友喜 (ともぎ)

プレイヤー名

シンドローム	ブラム=ストーカー ブラム=ストーカー	ワークス	小学生	カヴァー	小学生
オプション		年齢	11	性別	男
覚醒	忘却	衝動	妄想	初期侵食率	31 %
出自	父親不在	経験	喪失	邂逅	保護者

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	41
肉体	2	0	0			2	行動値	12
感覚	4	1	0			5	(非装備時)	12
精神	2	0	0			2	戦闘移動	17
社会	0	0	1			1	全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	5		射撃			RC	1		交渉		
回避			知覚	2		意志	2		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
赫き剣		0	0	消費HP]+8		使用時に[Lv*2]以下の任意のHP消費
赫き剣Lv7		0		~22		
赫き剣Lv8		0		~24		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
造血剤 (IC74)	
デモンズシード (HR87)	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
《申し子》	P	N		
阿倍野 莉緒 (あべのりお)	P 親近感	N 劣等感		
"ナニカ"	P 親近感	N		
西園寺 明灯	P 憧憬	N 不信感		
如月 夏彦	P 憧憬	N 隔意		
甲賀 亜久里	P 親近感	N 憐憫		
やすらぎ園	P 憧憬	N 不安		

最大財産P: 2 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
ハイパータフネス	5	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果:	最大HP+[Lv*3]							
鮮血の奏者	4	4	セットアップ	視界	単体	自動	-	
効果:	Lv点以下のHP消費→ラウンド中、攻撃力+[消費したHP*3]							
鮮血の一撃	5	2	メジャー	武器	-	白兵	-	
効果:	白兵ダイス+[Lv+1] / HP2点消費							
渴きの主	7	4	メジャー	至近	単体	白兵	-	
効果:	装甲値無視 / 命中→HP[Lv*4]回復							
コンセントレイト	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果:	C値-Lv							
朱色の大斧	4	4	メジャー	武器	単体	白兵	渴きの主	
効果:	1点→シーン中、攻撃力+[Lv*4]							
災いの魔剣	3	2d10	メジャー	武器	単体	白兵	100%	
効果:	HP1点→攻撃力+[消費HP] (上限: Lv*10) / 1回/1シナリオ							
赫き剣	7	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果:	武器作成							
破壊の血	7	2	マイナー	至近	自身	自動	赫き剣	
効果:	攻撃力+[Lv*3] / ガード値+5 / HP2消費							
赫き鎧	8	2+1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果:	装甲値: [消費HP]*2 / 使用時に[Lv*3]以下の任意のHP消費							
スーパーランナー	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果:	戦闘移動 / 移動距離+[Lv*5] / 1回/1シーン							
エナジーシフト	1	10	オート	至近	自身	自動	申し子	
効果:	HPダメージ0 / HP+[Lv*3] / 1回/1シナリオ							
かしづく歯車	1							
効果:	精密作業を逃さなくこなす							

PC1 ワークス/カヴァー: 自由/自由
ロイス: 阿倍野 莉緒 (あべのりお) P/N: 信頼/自由
君はPC2,3と共に孤児院で育った。
院長である阿倍野 莉緒の事は、心から尊敬している。
また、君は本当の母親のように思っているかもしれない。
そんな彼女に、暗い影が落とされるのを見過ごすことなんて出来なかった。

孤児院『やすらぎ園』で暮らす少年。
ちょっかい出しで少し調子に乗りやすい。
同園の他の子供やスタッフに対してよくいたずらをする所謂悪ガキ。
その根底にはもっと自分にかまってほしいという気持ちがある。
友喜という名前は阿倍野 莉緒につけてもらったものである。

—淡々と語ろう
物心ついたころには既に彼の父親は居なかった。
後述するように、母親に理由を尋ねる権限すら持っていなかった彼は今でもその理由を知らない。
ただ、その事実は彼の母親に精神的負担を与えていたことだけは確かだった。
典型的なネグレクトに陥っていた母親から彼が真つ当な愛情を受け取ることはなかった。
おまけに彼には他人には見えない何かが見えていた。
その事実はただでさえ希薄となっていた母親の愛情をもはや隔意へと変容させた。

